

目 次

- ・ 睦まじく、語らい、学び、若返る
——岡山高退教各支部「春の交流会」——
 - ・ 春の交流会で
 - ・ 「紙漉・千屋牛膳」交流集会に参加して
 - ・ 会に出ようとする気力が若さの秘訣？
 - ・ 岡山・旭東支部合同「春の交流会」
 - ・ 寄稿 五月の福島、その後考えた事あれこれ(第1回)
事務局だより
- 備南支部 木戸 清雄
備北支部 逸見 澄子
備西支部 清水 親義
中山 実典
佐藤静雄

睦まじく、語らい、学び、若返る

——岡山高退教各支部「春の交流会」——

高退教恒例の春の交流会が、下記のように、各支部で多彩に開催されました。

備南支部

【日時】3月22日(日) 12:30～

【場所】くらしき健康福祉プラザ

【内容】岡田純爾先生のお話

(「イスラム教の国パキスタンと中村哲先生～二度のペシャワール医療研修旅行から教えられたこと～」)

備北支部

【日時】3月24日(火) 10:00～

【内容】

新見駅集合

→親子孫水車見学→紙漉体験

→昼食・交流会

オプション：鱒釣りと焼き鱒体験

備西支部

【日時】3月27日(金) 9:30～14:30

【内容】やかげ文化センター集合

→福武家住宅→箭田大塚古墳

→昼食・懇親会

岡山・旭東支部合同開催

【日時】4月16日(木) 10:20～15:30

【内容】日生駅前集合→「加古浦歴史文化館」→日生漁協市場

→昼食交流→閑谷学校”講堂学習”

・"史跡散策”

美作支部

【日時】4月22日(水) 9:50~15:00

【内容】誕生寺集合→誕生寺見学
→片山潜記念館→月の輪古墳等

それぞれの交流会の様態について、参加者の方から記事を寄せていただきましたので、開催順に紹介します。

なお、美作支部の記事は、次号で紹介させていただく予定です。

春の交流会で

備南支部

木戸 清雄

岡田純爾さんの報告を聞きたいと思い交流会に足を運んだ。退職してからは会合というものに参加するのが億劫になっていた。5年ぶりとなる。もうこれっきり。理由があつてのことではない。体力がないせい（ということは気力もないせい）だと自分は思っている。

ペシャワール会や中村哲医師のことは以前から興味があった。岡田さんが2005年3月現地見学希望者募集に応募されたことは知らなかった。2007年にパキスタン医療フィールドワーク参加されたことも。

岡田さんは行動力がある。もちろん行動力だけではない。強い信条がある。

今回はその時のことを写真といっしょで紹介された。わずか2年の間に、治安のよくない状況が、夜中銃声が聞こえるほど格段に悪化していること、外国人特に欧米人に対する民衆の反感が高まっていて、病院で働く日本人スタッフも病院の業務以外での外出が一切禁止になっていることなどは、現地に居なければわからないことだ。日本人スタッフの一員伊藤さん（不幸にも殺害された）のご両親が脱穀機を贈られたという逸話のところで、岡田さんは声を詰まらせた。わたしだけでなく参加者も心を痛めた。



最近イスラム諸国でおきている一連の出来事は、何十年、いや1世紀を越えても解決を見るか見ないかの世界史上の出来事。その歴史の一コマに、わたしたちは立ち会っている。テロ（いかにも単発的、特異な事件）など一括りにしたら見誤ってしまう。イスラム諸国だけに限った問題ではないからだ。

わたしにはアフガンについてあるイメージがあった。空と大地。ただそれだけのふたっだけの空間。人間は空の下にある。いつも空から見られている。空から逃げることはできない。イスラムの祈りの根源には強靱な自然とひ弱な人間がある。だから人々は共同体をつくって生き、共同体を離れることをおそれる。シンプルと言えばこれほどシンプルなものはない。何ととってもそこに存在するのは空と大地と人間だけなのだから。これは以前読んだ岩波新書『アフガニスタンの農村』の影響。この本は1971年に初版というから、まだソ連がアフガンへ侵攻する以前の本。

ところが最近、アフガンではないが（モロッコ）、「空という巨大な目玉」という一文に出会って驚いた。「世界全体に蓋したような巨大な空は、何か意志を持ってこちらを見下ろしているように思える。どこにいても見られている。頭上に空があるかぎりその視線からのがれることができない。私はこの国の人々の宗教を感覚的に理解することはできないが、この巨大な視線を持った空を、私の知っているほかの言葉で表現しようとするれば、神という言葉がもっとも近いように思える」この文は彼の地を旅した作家角田光代。

日本人はイスラムに馴染みがない。最近になって日本人もようやくイスラム(地理的認識、その文化)と正面から向かい合い、理解しなければならぬところに追いついたのだと思う。ペシャワール会や中村哲をはじめとするスタッフボランティアの方々の活動は先駆。学ぶところが多い。

交流会の後半、参加者から近況報告があった。患っている障害や病気のこと、



家族のこと、楽しい旅のことのほか、九条の会など今取り組んでいるさまざまな会の活動のこと、限られた時間で話し足りなかったところもあったけれども、お一人お一人の言葉には感じ入るものがあった。

「紙漉・千屋牛膳」交流集会に参加して

備北支部 逸見 澄子



3月24日小雪舞い散る中を、13名が、「紙漉・千屋牛膳」交流集会に参加する。午前中は、夢すき公園内にある「紙の館」で、紙漉体験に励む。うちわや色紙大に紙を漉き、その上に紅葉や赤や紫色の小花を思い思いに配置したり、金箔等を散らしたりした。

これは、各自自由に作る事が出来る点はよいが、センスがものを言い中々難しい。

隣の山本先生の奥さんを見ると、空間の美しさが光っており、ハッスルする。だが、私のはまだまだだと思い、色紙に書く言葉を考えな



がら、悪戦苦闘する。参加者全員、真剣そのものです。

昼食は、「食源の里 祥華」で、千屋牛の焼き肉を中心とした料理に舌鼓を打った。これはどれも美味しく、みな満足顔でした。

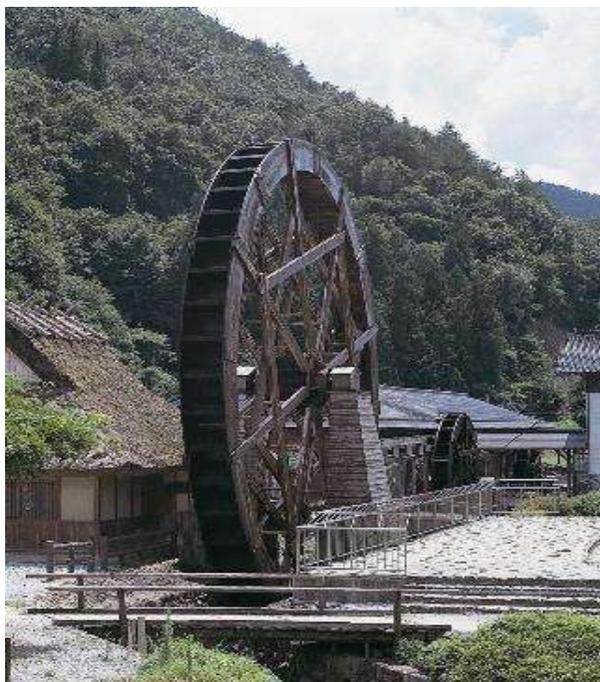
午後からは、オプションで約 10 名が鱒釣り体験に参加する。みんな寒風吹きすさぶ中、鱒釣りに夢中になり、童心にかえって楽しんでいた。私は、初めての魚釣りで 15 匹の釣果に、思わずニコリした。その場で、鱒の内臓を取り、串を刺して塩焼きをした。焼きたてを頂き大満足する。

釣る方は上手くいったが、串刺しには手こずった。参加した女性会員の方が、見かねて優しく教え手伝ってくれ、大変助かりました。

会員以外の人も、他の支部の人も多数参加し、和気藹々と楽しい交流集会となりました。

私も会員に同伴の参加でしたが、楽しい一日となりました。これもひとえに、お世話を下さった方々のご配慮があればこそと感謝いたしております。

(注 筆者は、会員の辺見良安さんの夫人で、交流会には、同伴参加してくださいました。)



写真は親子孫水車(新見市ホームページより転載)

会に出ようとする気力が若さの秘訣？

備西支部 清水親義

数日続いた花冷えから一転、思わず笑みがこぼれるような好天に恵まれた去る3月27日、2015年度岡山高退教備西支部春の交流会が開催されました。

今年も昨年同様、森文忠先生のお骨折りにより、矢掛の地開催となりました。参加予定者の内、体調を崩されて不参加となられた方が数名出たのも、この春の気温変化が余りに激しかったことによるところも大きかったのではないのでしょうか。それでも参加者16名で、昨年を上回る会となりました。

今年の会の「象徴」となったのが、最初の見学地である「道路脇の駐車スペース？」でした。

「道路脇云々？」と言ったのは勿論冗談で、本当は「古墳群付近」なのですが、もし案内もなくそこを訪れたとしたら、単なる駐車スペースとしか思えないところだったのです。

実際は、ご案内いただいた矢掛町教育委員会の西野望さんの解説により、そこから望む山の中腹に百を大きく越す古墳群があることを知り、「いやいや、説明があるのとないのとはえらい違いがある！」と、一同感心しきりだったのです。

次に訪れた福武家では、当代のご当主である福武氏のお出迎えを受け、恐縮致しました。ここでも西野さんの解説のお陰で多くの知識が得られ、「説明の有無による大きな違い」を実感することとなりました。解説がなければ、「立派な広いお屋敷」で済まされても仕方がないところですが、解説のお陰で、鉄砲で守られる造りになっている「事実上の城」であったことや、いくつもの座敷があって、それが奥に進む程立派な造りになっていることなどを知りました。世が世であれば、到底立つことさえ出来ない所に立っているのだと思うと、不思議な心持ちになりました。暖かいお茶までご用意いただき、お心遣い傷み入りました。

三番目に訪れた箭田大塚古墳では、倉敷市真備支所産業課の百本敏昭さんのご案内をいただきました。

真備と言えば「竹と筍」ですか、古墳を取り囲む竹の背丈が低くしてあることの意味（陽光を地面に届けること・冬の雪対策）や、中国産の筍が輸入されるようになるまでは、真備の筍は新車一台が買えるほどの収入にもつながったことなどのお話を聞きながら、石段を登りました。

この古墳について語る百本さんからは、「玄室の3基の石棺のうち2基は追葬されたもので」等々の説明の合間合間に挟まれる「三大巨石古墳の中でもここは特にね」等のちょっとした言葉から郷土愛まで伝わってきて、巨石の存在感に圧倒されながらも、何か幸せな気分になりました。

見学を終えた後は、昨年同様「食工房つお」で総会と懇親会を開きました。

近況報告は、「報告するほどの近況がない最年長の花田です!」「最年長だけでは分かりませんか?」という掛け合いとなった花田瑞穂先生から始まりました。先生が実際のお年を口にされると驚きの声が上がりましたが、皆様の近況をお聞きしながら、私(清水)は、「こういう会に出ようとする気力そのものが若さの秘訣なのではないか」という思いを強く致しました。

去年は森先生ご夫妻直々のご案内、今年は森ネットワークから町や市のお力添えまでいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。



岡山・旭東支部合同「春の交流会」

中山 実典(2010 年度入会)

4月16日、岡山・旭東支部合同の交流会がありました。行き先は日生と閑谷学校です。まさに菜種梅雨だったり、各地で雹が降ったり荒れ模様の天気が続いていましたが、16日はからりと晴れ上がりました。

この日は、開通した備前・日生大橋の渡り初めの日でもありました。橋上には、セレモニーをしている大勢の人影がありました。日生大橋を遠望した後、「加子浦(かこのうら)歴史文化館」を見学して、学芸員さんの説明を聞きました。備前市生まれの正宗白鳥、柴田錬三郎、牧野大誓、里村欣三や備前市で育った藤原審爾など備前・日生ゆかりの文人の資料が展示されていました。平成9年11月に開館ということでしたが、知りませんでした。



学習の後は、お魚の「五味の市」散策と海鮮料理『磯』で昼食・交流。焼き穴子、穴子の天ぷら定食など、前もって希望したメニューのお料理に舌鼓を打ちました。



食事が終わったところで近況報告。「孫が大きくなって、話が通じなくなった。」という方もおられました。私も、そのうちそうなるんだろうなと聞き入りました。

そして、閑谷学校へ向かいましたが、途中、「井田跡」に立ち寄りました。「井田（せいでん）跡」というのは、中国周代の井田法を模して、寛文 10 年(1670)岡山藩主池田光政が津田永忠に命じて、この地に造らせた遺構で、耕作地を九等分して、1 番地から 8 番地までは 8 軒の私田、9 番地を公田として 8 軒で共同耕作し、この収穫を租税として納めるもので、このような遺構は国内はもとより、中国にも現存の例がないという貴重なもの云々の説明がありました。



そして閑谷学校着。閑谷学校は、ご承知のように日本初の庶民のための学校です。世界遺産登録を目指しているそうですが、岡山県にこのような立派な学校があることは誠に誇らしいことです。昨年春、備前緑陽高校を退職されたという岡崎先生に施設を一通り案内して戴いた後、講堂学習をしました。「黙想」の後、「子曰わく、学びて時にこれを習う、・・・」と岡崎先生のを唱和した後、解説を聴きました。

そして研修生と同じく、「ほうき組」と「ぞうきん組」に分かれ、講堂の床の清掃をして講堂学習を終えました。束の間でしたが、正座をして、凜とした雰囲気を感じました。

そんなこんなの食事とお勉強の、天候に恵まれての春の交流会でした。参加者 16 人と少なくマイカーに分乗しての移動でしたが、久しぶりに顔を合わせる同僚もいて、有意義な 1 日になりました。計画や下見をして戴いたり、車を出して戴いた先生方、たいへんお世話になりありがとうございました。



寄稿

五月の福島、その後考えた事あれこれ

(第1回)

佐藤 静雄

会員の佐藤静夫さんが、東日本大震災・福島原発事故に関連して、文章を寄せてくださいましたので、2回に分けて掲載します。

2011年の東日本大震災があつてから、その年の五月から震災一年目の2012年3月まで岩手に5回、2013年には5月に福島に行った。その都度、岡山に帰るとお世話になった人に報告書を届けるべく文章を記した。今年の5月に再度、福島に行く機会を得た。しかし、帰ってから何度も文を記す試みをしたのであるが、どうしても筆が進まなかった。どうしても気持ちが集中出来なかった。今、なんとかして、短文でも思いを残そうと筆を持っている。

しかし、6月から9月の4ヶ月なんと多くの事があつたのだろうか。政治的には、憲法問題・・・広島での豪雨被害・・・。そして、原発事故がまるでなかったの如く日々が続く。シリアの混迷は、誰も解決の方法が兄いだされないでいる。わが家では、長年アレppoの石鹼を愛用し、いつの日か古代の遺跡を巡るシリアの旅を夢にみていた。イラクも含め行けそうにない。エジプト、トルコ、イランを旅した事がありシリアを見たいと思っていた。また中国の新彊ウイグル自治区でも混迷が続く。かつて、シルクロード幻想のもとウルムチ、アクス、カシュガル、ヤルカンド・・・の旅、未踏峰の山への *Expeshisyon* などでウイグルの人達と関わりを待った事があり複雑な思いになる。四半世紀前の未踏峰挑戦のおり下山後、ウルムチで開かれた自治区要人との宴で登山隊のパートナーである高のウイグル人の登山家は、隅に冷遇されていた。漢族のウイグル人差別を見た。ただ、現状の過激な事件は、ほんとうにウイグルの人達のためになっているのだろうか。イスラム国の報道を見るにつけ考えてしまう。情報が、中国政府からの一方通行ゆえ分からない。しかし、先日の多数派である漢族と少数派であるウイグル人の融和に力を注いできた学者であるイリハム・トフティ氏への裁判にはあきれざるばかりである。

福島の事故にもかかわらず中国電力は、上関に発電所を造ろうとしている。反

対の島、祝島の報道もある。平和に暮らしてきた島に突然巨大な魔物が襲いかかる。長い間。かつて、苫田ダムが出来るとき幸せであった共同体を破壊した。ダム予定地の人々の心を分断した。私は、岡山にきて二年目偶然にダム予定地に2年間住んだ。ダム賛成派の<金次第>という看板を眼にした時は、やるせない気持ちになった。幸せだった共同体が破壊され、争う構図である。そう言えば、尖閣列島で日中間に火を付けた元都知事の息子である前の復興大臣も<金次第>と言った事を思い出した。

今日現在、どんどん円安が進む。円が、安くなるという事は、日本自身が安くなっている事は、自明の事であるが政府は円安を推進している。いったい誰のための政策であろうか。また、今年の米価は、大変安い。生産者の事を考えない政府は、さらに TPP を推進している。あれやこれや気持ちの沈む秋です。

5月の下旬、原発から14キロの牧場にいた。朝、素敵な牧場主の姉名義の山荘風の家のデッキに座る。犬が猫が寄って来る。朝霧の中小鳥が鳴き蛙の声もするのどかな朝である。昨夜は、同じ場所で夜空の星を眺めた。しかし、ここは避難地区住めない場所である。原発の煙突も見える。牧場主の吉沢さんが原発の爆発を見たデッキである。原発事故さえなければ、のどかな緑豊かな牧場である。牧場の手伝いは、約300頭の牛の餌やりである。牧草ロール、野菜屑、モヤシ屑など与える。牧草も汚染している。昨年より牛は太ってみえた。餌やりのほか水はけ水路の修理、牧場周りの囲いの修理など様々である。作業の合間、昨年に行った浪江請戸地区を見に行った。今年の3月11日の朝日新聞一面の写真の地区である。おそらく、原発交付金?で建設されたか立派であった請戸小学校は、車が突っ込んだままの瓦礫状態そのままであった。アルバム、教材も教室の隅に置かれたままである。体育館の卒業式の垂れ幕もそのままである。地区の雑草の中の車、船もそのままである。小学校の黒板には、卒業準備の学級当番の書き付けに混ざりこの5月に、この地区の不明者の捜索をした鳥取の自衛隊の隊員の文字もあった。請戸地区は、死者不明者を180人ぐらい出したとか、しかし瓦礫の集積は少しは進んだもののあまり変化は見られない。行くごとに変わっていった岩手を思う。瓦礫と化した漁港に眼をやると海上には、海上保安庁の船が停泊していた。原発テロに備えた事か?五キロ先に原発の煙突が見える。無論、許可証を持っている吉沢さんの車ゆえ入れた。帰ろうとすると、浪江的「副町長と出会った。車から出られた副町長と話す。浪江町は、全町避難理区で庁舎は、中通りの二本松に移している。氏自身も請戸に家がありことごとく流されたとの事、今は現地の復興責任者であるとの事である。彼の言葉によると原発事故は収束している、安全な地帯と言う。そして、港から2キロあたりから土地のかさ上げをし町の再建と言う。しかし、かさ上げの土は不足していると。かさ上げた土地に3年後には、人が帰って来ると。(以下次号に続く)

以下編集集中です

しかし、打ち上げられた船、野草の土地を見ていると不可能に見える。放射能のもと漁港の再建は不可能である。私は、旅人なりてかってな事を言うのははばかられることであるが・・・。再建したい気持ちは分かるというのとも言えない。いよいよ東電、国に腹が立った。氏に、帰って来て米を作る人はいるのかと聞くと「そんな事は、聞かないで欲しい」とくり返される。幸い心情がみえる気がした。映画が出来た。<福島 生きものの記録-シリーズ-異変一>と言うらしい。福島から拡散した大量の放射能物質が生態系にどんな影響をもたらしたのか問う映画という。その中に牧場の牛が紹介されるという。牧場には、斑点の出ている牛がいる。6月の日比谷での上映に合わせ牛を連れて行きたいと吉沢さんは言う。しかし、原発20キロ圏内の牛は移動させてはならないとの行政指導があるとの事である。牧場の斑点牛は、ほんとうに被曝が影響しているのだろうか。昨年、某週刊誌が大きく報道した。吉沢さんは、長年の牛飼経験により被曝の影と言う。多くの学者達は、原発事故に伴う生物の影響について関心を寄せる人が少ないとの事である。なぜだろうかと思う。多くの動植物に異常が見られるとの報道もある。斑点牛の問題も軽々に判断せず時間のかかる事であろうが。吉沢さんは、経験から被曝が斑点と確信していると言う。映画の上映に合わせ牛を東京に連れて行きたいと言う。それには、農水省、県当局などの許可を得る必要がある。そこで、相馬家畜保健所に相談に行った。家畜保健所に入る交差点には、大きな南相馬市立病院があった。

原発爆発のおり多くの若い看護婦達は我が子を連れて避難したという。それは、やむを得ない状況である。結果、少数の看護婦医者が酸素欠乏のもと頑張ったとの事と聞く。家畜保健所は、政府の被曝牛殺傷を受け持った保健所である。殺傷牛は、1800頭にもなったとの事である。保健所は、本来は牛をはじめ家畜の健康保全のための仕事ゆえつらい業務であったらうと思う。保健所では、吉沢さんに同行し所長らしき人と対面した。当然、国の決めた事ゆえ難しいとの事である。しかし、要請書類を出して欲しいとの事である。その書類は、県、都、国を回り決済が出るのでは。それでは、間に合わない事になる。所長を責めるべきではない。所長自身も原発被害に悲しみ出来るだけ早い放射能被害から解放される事を願っていると思う。その意では、福島の牛に被害が出ている事はあまり披渡したくないのだろう。そこに福島の屈折感がある。原発被害を全国に知って欲しい気持ちと、被害が流布されるほど福島の農産物が売れなくなるという二律背反状況にある。原発被害については、<美味しんぼ→問題で政府、県当局の異常な反応にもびっくりした。当局は、原発被害がないと言っているようにみえる。首相は、昨秋のオリンピック招へい演説で原発は完全にコントロールされているとして世界中から失笑を買った事もあった。高市早苗氏は、自民党政調会長の折り「爆発

事故を起こした福島原発も含めて死亡者が出ている状況にない」と言う。氏は、今総務大臣どうなっているのだろうか。原発さえなければと牧場に書き残し自殺した事件を思い出すまでもなく多数の人が自分で命をたっている。福島の人達の喪失感は想像に余りある。

吉沢さんは、今全国の集會に呼ばれている。灘高校など学校での講演会にも呼ばれている。氏は、世の中を変えるには教育の問題と言う。私もそう思う。しかし、現状の教育の状況をみると暗い気になってしまう。今、中高を含め受験学力の学習に追い回されている。

教師達は、残業に追い回され休みも取れない状況にある。ゆえに、教師達は多忙で学習しない、本を読まない人種にさえみえる。学習しない教師達に本当の教育が出来るわけがない。受験学力で育った教師が教壇に立つ。いい学校?にいれる事が指導であり学習である。

英語学習は、点取り記号にさえみえる。このような状況悩む教師も多いのだろう。教師の精神障害も多い。理想と現実の帝離はあまりにも大きいように見える。教育を変えるのは、政治である。国民投票が、18歳になると聞く。私は、反対である。なんの政治教育もせず政治に参加などとんでもない。学校で政治教育を小学校から年齢に合わせすべきと考える。そこに自立としての教育があると思う。横並びで出る釘を叩くのではなく、自分で学ぶ自立的教育で欲しいと願う。疑似儒教社会の克服とも言える。

2014.9.25

附。最近読んだ本少し挙げておきます。

<フクシマと沖縄・前田哲男・高文研>前田氏のジャーナリストとしての軌跡とも言える本です。ビキニ環礁での放射能被害で除染が出来なかった事、低線量外部被曝でも時間の経過のもと障害が現れている。ウトリップ島という500キロ離れた島でも障害が出るという記述もある。

<日米〈核〉同盟一原爆、核の傘、フクシマ・太田昌克・岩波新書>いかに戦後の政治家たちが虚言のもと国民を愚弄してきたか丁寧に明らかにします。藤山愛一郎、大平首相など人の良いと見えた人も。佐藤首相にいたっては、駐日大使の面前で「比非核三原則はナンセンス」とまで言っている。ノーベル賞、遺族が返還すべきです。

<辺境からはじまる-東京、東北論・赤坂憲雄、小熊英二編。明石書店>福島の浜通りについて戦後の日本の歩みとともに明らかにします。若い学者の論考も参考になります。

<原発一揆・針谷勉・サイゾー→福島希望の牧場の本で吉沢氏の父からの歴史を描きます。満州棄民から帰国牛飼いに・・・。

<希望の牧場・岩崎書店>牧場の原発事故以来の絵本です。子ども達にもよく分

かります。

附の附。朝の連続ドラマ久しぶりに観ました。そこで、<白蓮れんれん・林真理子・集英社>を読みました。愛憎劇の文章には少し疲れましたが・・・。白蓮の駆け落ちの夫は、宮崎とう天の長男で、彼との白蓮の息子は終戦間際に戦死。彼女は、短歌で「人の世にあるべきものか原爆の・いくさは遠く根の国へゆけ」と記しています。永瀬清子は皇后美智子さんが<あけがたにくる人よ>を英訳した詩人ですが、最近、清子の長女の母思い出とする私家版の本を手に入れて読んでみて、清子は、白蓮と交流があった事が分かりました。

清子の<あけがたにくる人よ>の本は、晩年に清子本人からサインしていただきました。

また、日本の教育の問題は近代教育から検討すべきと考えていた時に<福沢諭吉の教育論と女性論・安川寿之輔・高文研>に出会いました。福沢の今日の評価をひっくり返す論考です。